書　評・紹　介

Can M. Aybek, Johannes Huinink, and Raya Muttarak, Editors

Spatial Mobility, Migration, and Living Arrangements

Springer, 2015, vi+246pp.

本書は様々なタイプの移動がパートナー選択，夫婦関係そして家族関係に与える影響についてまとめた論文集である．全11章の著者の多くはブレーメン大学を中心とした社会学系のドイツの研究者であるが，トルコ，イタリアやスペインなどの研究者も含まれる．本書の特徴は，移動を単に常住地の変化と捉えるのではなく，通勤，単身赴任，別居など伝統的な移動研究が移動として捉えなかった事象（spatial mobility としてまとめられている）についてもデータを用いて質的・量的両方の側面から実証的にアプローチしている点である．

第１部（１章～４章）は編者らによる第１章の導入部分に続き，国際移動とパートナー選択・家族形成に関する３本の論文で構成されている．第２章は結婚を目的とした国際移動（Aybek, Straßburger and Yüksel-Kaptanoğlu），第３章は移民第二世代のパートナー選択と家族の影響（Topgül），第４章は国際結婚カップルの出生力（Glowsky）をテーマとしている．第２部（５章～７章）は仕事関連の spatial mobility とパートナー関係に係わる３本の論文から成っている．第５章は長距離通勤に関する認識（Viry and Vincent-Geslin），第６章はカップルの居住形態と各々の通勤時間がカップル満足度に与える影響（Feldhaus and Schlegel），そして第７章は長距離通勤が離別に及ぼす影響（Kley）である．最後の第３部（８章～11章）は spatial mobility と家族のライフコース，及び居住形態との関係に関する４本の論文が含まれている．第８章は移民の居住形態（Arpino, Muttarak, and Vitali），第９章は大学生の労働市場に対する認識と離家（Luetzelberger），第10章は離別後のカップルと子どもの居住地（Schier），そして第11章では人生後半部分での移動可能性（Milewski and Loth）について取り上げている．

目次をみてもわかる通り，本書は非常に広範囲なトピックをカバーしており，これが強みではある．しかし，何が各章を貫く柱なのかが見えにくい．編者は第１章で移動要因と移動が及ぼす影響への理解を深めるためには，移動研究に内在する国内移動と国際移動の二分割状態を打破する必要があると述べる．というのも国際移動に大きな影響を及ぼすのは国の入国・移民政策であり，それを除けば移動要因に国境は関係無いためである．そして，両者をつなぐ概念として spatial mobility を提示し，更にそれを（1）居住住宅から出発して再び戻る動き（通勤など）と，(2)(1)以外の動き（居住地の移動や国際移動など），の二つに分類している．この２区分は評者からみるとあまりに大まかであり，通勤から国際移動まで全てを含むことが可能であるがゆえに本書全体の論旨がぼやける要因の一つとなっているように思われる．

一方，本書は先進国における国内移動研究の新局面に光を当てたとも言える．かつて Hugo がインドネシアの国内移動研究において，国勢調査や大規模なサンプル調査で把握するのが困難な季節的な移動，短期集中型の一時的な移動，出稼ぎ的な移動，等について整理したように，本書は現代の先進諸国にしばしば見受けられる単身赴任，遠距離居住するカップル，別宅を持つ世帯，離別後子どもの行き来を考慮して近居する元カップルと子どもなど，調査で捉えることが難しい居住形態の人々に注目してそれが与える影響について考察している．New Economics of Migration 理論が指摘するように移動を家族戦略の産物としてみるならば，移動研究の対象が家族の居住形態に密接に係わるのは当然のことであろう．本書は，今後ますます複雑化・多様化していくであろう家族形態と人の動きを理解するための一助になると考える．（千年よしみ）